

令和元年9月3日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13164

研究課題名(和文)「演歌型」大衆音楽の国際比較研究：東欧とアジアを中心に

研究課題名(英文) The Comparative Study of "Enkaesque" Popular Music Genres

研究代表者

伊東 信宏 (Ito, Nobuhiro)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：20221773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主題をめぐって、2017年2月、大阪大学において国際フォーラム"Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia"を開催した。ここでは東欧とアジアの「演歌型」大衆音楽に関する研究発表11件と討議が行われた。この内容の大部分について原稿がまとめられ、現在単行本『東欧演歌の地政学』(仮題)として編集中である。そのほか、2019年3月にはブルガリア、ソフィア大学において、研究代表者自身が基調講演「2010年代の日本の若者における音楽行動」を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の文化は、これまでしばしば外国のモデルに沿って理解されてきたが、日本の文化現象をモデルとして海外の文化を理解する試みは多くない。「東欧演歌」という概念は、演歌という日本の音楽ジャンルをモデルとして、東欧諸国や東アジアの各地域において親しまれているポップフォーク(民族的な色合いを帯びた大衆音楽ジャンル)を理解しようとするもので、民族音楽学、比較音楽学、大衆音楽研究にとって新しい視座を提供するものである。本研究は、そのような国際比較研究の手法を構築し、国際フォーラムを開催し、最終的に出版物として社会に発信するという点で意義があった。

研究成果の概要(英文)： On the topic of our research, the international forum, "Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia" was held at Osaka University in February 2017. Here 11 presentations were given and discussed on the problems on "Enkaesque" genres in East Europe and East Asia. Most of the presentations were submitted and now ready for coming publication as a collected essays 'The Geopolitics of "Enkaesque" Music Genres in East Europe'. In March 2019, I read a paper in a symposium in Sofia University, Bulgaria, titled "Listening Life of Japanese Youth in 2010s" as a keynote speech.

研究分野：東欧を中心とする音楽史、民俗音楽、大衆音楽研究

キーワード：「演歌型」大衆音楽 チャルガ ポップフォーク マネレ ターボフォーク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

本研究開始以前、特に平成 24 年度～27 年度に筆者が研究代表者として行った科学研究費基盤 (B)「旧東欧地域における『演歌型』大衆音楽の比較研究」などにおいて、研究代表者は 1989 年の体制転換以降に旧東欧諸国に登場した「演歌型」大衆音楽ともいべき諸ジャンルの研究を行ってきた。これらの諸ジャンルは、1) 欧米のポップスの基本語彙であるベース&ドラムスを基礎としながら、2) 発声、歌い回し、楽器法などの点で、民俗音楽の要素を暗示しつつ、3) テレビやカセットテープといった媒体により大衆に浸透したジャンルのことであり、ブルガリアの「チャルガ」、ルーマニアの「マネレ」、旧ユーゴスラヴィアの「ターボフォーク」などがその代表である。それを「演歌型」と呼んだ時点で、この種の音楽の持つ、演歌との類似性は意識されていたが、「西洋音楽」が世界各地のローカルな民俗文化にショックを与え、そのショックから生み出された音楽という意味で、日本の「演歌」と東欧の諸ジャンルのみならず、インドネシアの「ダンドゥット」や韓国の「ポンチャック」、タイの「ルークトウン」などのジャンルについても比較考察が必要であることがわかってきた。本研究課題は、この着想を展開しようとするものだった。

## 2. 研究の目的

本研究では、東欧諸国の「演歌型」大衆音楽に加えて、日本、韓国、台湾、タイ、インドネシアなどアジアにおける「演歌型」大衆音楽の比較を行うことを目指し、その理論的枠組みの形成、国際共同研究組織の構築、多言語、多文化社会における大衆文化の比較研究のモデルを提示することを目的とする。

## 3. 研究の方法

主として下記のような手順で研究を進めた。

- 1) これまでの研究成果の整理：研究代表者は、すでに科学研究費 (B)「旧東欧地域における『演歌型』大衆音楽の比較研究」などにおいて、本研究課題の基礎となる研究を行ってきた。これらについて改めて成果を整理し、協力者と共有できるようにする。
- 2) 国際研究フォーラムの開催：連携研究者、海外の共同研究者、さらには各種研究協力者などのメンバーにより、国際研究フォーラムを開催する。これは予定よりも早く平成 28 年度末に実現し、下記のような成果を得た。
- 3) 研究成果の共有、公刊：上記フォーラムにおける発表を論文の形で提出してもらい、論集として出版する。また Web などを利用しながら、連携研究者、海外共同研究者などが利用できるように情報を整理し、共有できるようにする。
- 4) 海外の研究集会での発表：本研究課題の成果についても、国際的な研究集会において発表を行い、より広い議論を喚起する。

## 4. 研究成果

2017 年 2 月 14 日、15 日の 2 日間、大阪大学会館 21 世紀懐徳堂スタジオにおいて、国際フォーラム “Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia” を開催した。ここでは本研究課題に関わる東欧とアジアの「演歌型」大衆音楽に関する研究発表 11 件と討議が行われた。この内容の大部分については、原稿がまとめられ、現在単行本『東欧演歌の地政学』(仮題)として編集中である。

またこの国際フォーラムについては、筆者自身が『レコード芸術』誌に報告を書き、さらに筆

者自身の著書にも掲載されている。

その後の研究成果については、2019年3月にブルガリア、ソフィア大学で開催されたシンポジウム「日本とブルガリアにおけるポップカルチャーと若者」における研究代表者自身の発表「2010年代の日本の若者における音楽行動」に、その一部がまとめられ公表された。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

とりわけ本研究課題の核心となる論文は次の3件である。

- 1) 伊東 信宏「映画『この歌は誰のもの?』」、『レコード芸術』2019年3月号、査読なし pp.57-60。
- 2) 伊東 信宏「芸能の地平へ:宇多田ヒカルの行方」、『レコード芸術』2018年11月号、査読なし、pp..57-60。
- 3) 伊東 信宏「国際フォーラム『東欧演歌』」(『レコード芸術』2017年4月号、査読なし、pp.57-60、(なおこの論考は下記の単著『東欧音楽綺譚』に収められた)

〔学会発表〕(計12件)

上記国際フォーラムにおける発表(場所はいずれも大阪大学会館、21世紀懐徳堂スタジオ)

- 1) Nobuhiro Ito, Keynote speech for International Forum "Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia", 14th February 2017.
- 2) Fumitaka Yamaguchi, "Decolorizing" popular music: Colonial vestiges and cultural politics in postcolonial Korea and Taiwan, 14th February 2017.
- 3) Iva Nenic, "What's folk about (pop)folk? Continuity, change and "coming together" in Serbian popular music, 14th February 2017.
- 4) Ventsislav Dimov, Lozanka Peycheva, "The soft power of Ethnopol Music: examples from Bulgaria and the Balkans, 14th February 2017.
- 5) 濱崎 友絵「『アジュ』を歌え:トルコにおけるアラベスクの誕生と展開」(2017年2月15日)
- 6) 高岡 智子「東ドイツ・ロックは芸術か?:文化政策から誕生した音楽」(2017年2月15日)
- 7) 上畑 史「セルビアのターボフォーク:『オリエンタルなベルベット』は何色か」(2017年2月15日)
- 8) 新免 光比呂「西欧化のジレンマとマネーレ:ゆらぐルーマニア人のアイデンティティー」(2017年2月15日)
- 9) 斎藤 桂「森への誘い:フォーク・メタルにみる民族/民俗」(2017年2月15日)
- 10) 輪島 裕介「演歌は東欧演歌か?」(2017年2月15日)
- 11) Klara Hrvatin, "Slovenian turbo-folk music at its starts" (2017年2月15日)

それ以外の研究発表

- 1) 伊東 信宏「2010年代の日本の若者における音楽行動」, ソフィア大学シンポジウム「日本とブルガリアにおけるポップカルチャーと若者」, 2019年3月12日、ソフィア大学大講堂。

〔図書〕(計2件)

- 1) バルトーク・ベーラ著『バルトーク音楽論選』伊東 信宏、太田 峰夫共訳、ちくま学芸文庫、平成30年6月、全287頁。
- 2) 伊東 信宏『東欧音楽綺譚』音楽之友社、平成30年9月、全256頁。

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等 Pop-folk genres in East Europe and East Asia

(<https://musicologyosaka.wordpress.com/2017/02/11/the-international-forum-pop-folk-genres-in-east-europe-and-east-asia-parallel-phenomena-on-both-sides-of-eurasia-2017-2-14-15/>)

その後の展開については現在、準備中。

## 6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者

本研究では連携研究者、および海外の研究協力者として次の各氏の協力を得た。

輪島 裕介 氏 (Wajima Yusuke 大阪大学准教授)

斎藤 桂 氏 (Saito Kei 大阪大学助教 京都市立芸術大学講師)

上畑 史 氏 (Uehata Fumi 日本学術振興会特別研究員、大阪大学大学院 国立民族学博物館)

海外の共同研究者

イヴァ・ネニッチ (Iva Nenić、ベオグラード芸術大学講師)

クララ・フルヴァティン (Klara Hrvatin、リュブリアナ大学助教)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。